

香山六郎と聖州新報（二）

半澤典子

第2章

第1節 一渡航者としての移民通訳・コロノ監督時代

「香山六郎と聖州新報（一）」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編』第13号、2014年）では、香山六郎の生誕から伯刺西爾行第1回移民船笠戸丸へ非移民として乗船した迄を辿り、その際、『回想録』との関わりから4つの問題点すなはち、①なぜ、ブラジルへ行ったのか、行かなければならなかったのか、②いつ頃からブラジル渡航を考え始めたのか、③何故、いつ、単なる渡航者から一移民へと意識の転換を図ったのか、④一移民として開拓農民になりながら、何故、聖州新報を立ち上げようとしたのか、その根拠は何で、どこにあったのか等を提起し、問題点①及び②については前回論証したので、本論では問題点③及び④について、論証を試みる。

日本人移民のブラジル国内における移動の動機として、1) 自然災害、2) 土地の自然的・社会的条件、3) ブラジル社会における政治的・経済的諸制度、4) 日本人としてのアイデンティティ、5) 親族や知人、地縁集団による呼寄せ、勧誘、6) 日本政府の対応等が想定される。香山の場合にもこれ等との関連があるものと考え、これ等の動機を考慮しつつ論証する。

1. 皇国殖民会社

香山を乗せた笠戸丸は1908年4月28日神戸港を出航し、太平洋・インド洋・大西洋を經由し、52日かけてブラジル国サンパウロ州サントス港へ同年6月18日到達している。予定より12日も遅れてしまっていた。この遅れは、移民達のブラジルでのコーヒー収穫作業に関わる重大問題であった。この遅れが、移民の入耕地でのトラブル発生の原因の一つになってしまっていたからである。その遅れた理由は何だったのか。以下に論証する。

皇国殖民株式会社は、1903年8月27日付、斎藤修一郎以下8名の発起人により「移民取扱業許可申請書」及び「皇国殖民株式会社定款」他が外務大臣小村寿太郎に提出・許可され、1904年3月31日「開業届」の提出、営業保証金3万円の納入後、東京市京橋区鎗屋町10番地に開業した。取締役会長は澤宣量、資本金20万円、本社株式総数8000株、1株25円であった。発起人の一人であった水野龍は500株分を出資し、発起人総代としての「総代届」を外務大臣に提出している¹⁾。1905年には合資会社に変更、業務代理人19人の中に上塚周平の名前も掲載されている²⁾。

移民輸送会社としての体裁を整えた皇国殖民合資会社は、熊本県を初め全国11県に出張所を開設し移民募集活動を展開している。1908年2月から1909年1月までに同届を提出した県は、熊本、山口、鹿児島、沖縄、新潟、宮城、福島、愛媛、滋賀、岡山、兵庫の11県であった³⁾。1907年9月、水野龍はブラジルへ出向き翌1908年1月3日帰国している。その目的は、1907年11月6日サンパウロ州政府と皇国殖民合資会社との間における、向こう3年間に日本移民3,000人の輸送に関する移民契約書の正式調印にあった。文書冒頭には

サンパウロ州統領ドクトル・ジョルジ・チビリッサ、農商工務長官ドクトル・カルロス・ジ・ポテリョ、日本東京皇国殖民会社社長ニシテ該会社ノ代表スル全権ヲ有スル水野龍諸氏列席ノ上（略）会社ヲ代表シテ各契約当事者ノ承認セル左記条件ニ依ル所ノ日本移民輸入契約ニ調印センカ為ニ渡来セシコトヲ宣言シタリ（略）⁴⁾

1) 外務省通商局「移民取扱業願ニ関スル件 第798号」（1903年10月）、「移民取扱業許可申請書」、「移民保護法施行細則第5条規定ノ調査」、「総代届」、（以上1903年8月）、「皇国殖民株式会社定款」、「開業届」（1904年3月）、「保証金納付ノ件」（1904年4月）、『皇国殖民株式会社業務関係雑件』単巻、外務省外交史料館、3門8類2項196号、1903年10月-1904年4月。以後、外務省通商局は通商局と略す。

2) 通商局「業務代理人許可出願之件」『皇国殖民合資会社業務関係雑件（二）』外交史料館、3門8類2項217号、1907年。

3) 通商局「出張所設置移籍廃止等届出ノ件」、1908年2月-1909年1月。

4) 通商局「伯国サンパウロ州政府ト本社トノ間ニ締結セル契約書譯文」『皇国殖民合資会社伯刺西爾国移民取扱一件 明治四十一年』外務省外交史料館、3門8類2項0目243号、1908年。

とあることから証明される。本契約の第1条には、移民とは農業労働に適する者3人～10人により成る家族を構成した日本移民3,000人のことで、12歳以上45歳までの男女で上記労働に適する者と見做すとあり、会社は彼らをサントス港まで運送する義務を有すとある。第2条では、石工大工又は鍛冶のような農業以外の移民も受領するが、その数は移民総数の5分を超過してはならないと規定し、第3条には、移民の輸入は1908年より始め毎年1,000人を限度として輸送する。第1回移民は本年5月中、当州に到着すること等とあり、水野はこの契約書を持って急ぎ帰国し次の対応を迫られていたのだった⁵⁾。

条約締結文中における「皇国殖民会社」という表現は非常に曖昧である。この会社は1903年開業当時は「株式会社」組織であった。その当時の会社設立発起人代表は水野龍であったが、取締役会長は澤宣量であった。1905年、株式会社から合資会社へ転換し移民取扱営業権を譲渡され、その時点での水野龍の役職は無限責任社員であった。1908年には無限責任社員並びに業務執行社員として松井淳平が登場し、水野は業務執行社員の肩書だけとなった。以後、諸書類末筆に記載される名前は業務執行社員の松井淳平が殆んどである。また既版のブラジル移民関係書等には、「皇国殖民会社社長水野龍」の名前が頻出するが、外務省や警視総監と皇国殖民会社との文書中にはそのような役職名は登場しない⁶⁾。社長名は前出の「日本東京皇国殖民会社及ヒサンパウロ州政府間ニ締結シタル日本移民三千人ヲサンパウロ州ニ輸入スル契約書」の文頭と文末に「皇国殖民会社社長水野龍」とあるのみである。

帰国した水野は早速、東洋汽船株式会社から同社の汽船「笠戸丸」を4月10日に横浜港から出港させる契約を交わすと同時に、安楽警視総監に報告する。一方、地方の出張所を通して契約移民1,000人を募集している⁷⁾。「伯刺西爾移民募集地方別予定表(1908年3月)」によると、前記

5) 前掲注4に同じ。

6) 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、1941年、259頁や入江寅次『邦人海外発展史(下)』原書房、1981年、42頁には「水野龍は皇国殖民会社の社長」という断定表現があり、香山六郎『移民四十年史』香山六郎、1949年、22頁や内山勝男『かさと丸』日本移民五十年祭委員会、1958年13頁にも「皇国殖民会社社長水野龍」とある。

7) 通商局「契約書」1908年3月。東洋汽船株式会社社長浅野總一郎から皇国殖民合資会社宛書簡。「御請書」1908年3月、皇国殖民合資会社業務執行社員松井淳平から警視総監安楽兼道宛て書簡。「笠戸丸」とは、日露戦争時バルチック艦隊

表 1 伯刺西爾移民募集地方別予定者数の変動（1908年）

府県名	3月18日現在			4月11日現在			4月14日現在		
	予定数	大工・左官・ 石工等	予備員	予定数	大工・左官・ 石工等	予備員	予定数	大工・左官・ 石工等	予備員
沖縄	250		50	400	30≦	80	400	9	80
鹿児島	170	20≦	34	270	7≦	54	250	20	54
広島	180	20≦	36	33	5	6	47	13	6
山口	100	5	20	39	4	7			7
熊本	100	5	20	80	4	16			16
福島	50		10	105		21			21
新潟	45		9	9		2			2
宮城	25		5	6		1			1
高知	30		6	30		6			6
山梨	30		6	0		0			0
愛媛	20		4	21		4	27	0	4
東京	0		0	7		1			1
合計	1000		200	1000		198	724	42	198
総数		1200			1198			922	

皇国殖民合資会社「伯刺西爾国移民取扱一件」1908年より作成

の全国11の出張所等から募集した移民内訳は予定数1,000人、予備員200人の合計1,200人で、大工左官等の農業以外の移民割合も移民総数の5分を超過せず、この時点では契約予定人数を上回った募集が行われていたことがわかる⁸⁾（表1）。表1によれば、州政府との契約履行のため、1カ月足らずの間に移民を全国から募集していた訳だが、特に4月11日と14日との募集数の変動があり過ぎる。沖縄県の場合、僅か1カ月足らずで100人もの応募者が増減し、石工左官等の農業移民以外の予定数も予定数の3分の1に激減しているなど不自然だ。また、出港時の1家族の平均人数は6.9人となり、出港時総数781名と家族数165の平均人数4.7人を大きく超えている。サンパウロ州政府との移民契約第1条では「農業労働に適する者3人～10人により成る家族を組織し」とあることから、契約違反ではないにしても、所謂構成家族であることが想像される⁹⁾。結果、4月14日現在の渡航者予定数は724人となり、予備員数198人を加え

所属の病院船「カザリン号」で、東洋汽船株式会社に払下げられたものを移民船に改装していた。

8) 通商局「伯刺西爾移民募集地方別予定表御届」1908年3月。東京朝日新聞1908年2月26日付4面に「伯西移民開始」とある。以後、東京朝日新聞は東京朝日と略す。

9) 内山勝男「笠戸丸便 第一回伯刺西爾行移民名簿」『かさと丸』竹村殖民館1958年、73頁によれば、沖縄県島尻郡大里村の照屋堅喜を家長とする一家族は、家長夫婦と夫婦の従兄弟16人で、その姓は照屋以外に宮城、仲本、大城、知念、新里、伊良、安谷の7姓が記述されている。構成家族であることが明白である。

ても、サンパウロ州政府との契約条件の一つである移民数1,000人を下回ってしまった。契約条件を満たせず資金調達に翻弄された皇国殖民合資会社は、出港予定日遅延に伴う移民達の神戸での宿泊代金の工面にも困惑し、その保障を廻って外務省間のやり取りが行われていた事などから、予定日の4月10日に出発できなかったことが判明した¹⁰⁾。皇国殖民合資会社は、4月21日神戸港出航への変更認可を願った「移民出発期日延期願出之件」と「期日延期ノ為ニ生スル移民費用ニ関スル件」などを安楽警視総監宛に提出し、総監は石井外務省通商局長に宛て「移民取扱人皇国殖民合資会社ヨリ南米伯刺西爾国行移民出発期日延期ノ件ニ附別紙ノ通申出候ニ就テハ至急御意見承知致度此段及照会候也 明治41年4月7日」という文書を送り、経営難に陥っていた皇国殖民合資会社の経営確認を取っていたことが判明した¹¹⁾。また、総監から通商局長宛てによれば、皇国殖民合資会社が移民より神戸滞在中の宿泊費を徴収するとの聞き込みに対し、会社側にそのような事はしないよう外務省へ内報するとの通信がされており¹²⁾、これらについて皇国殖民合資会社側は「答申書」を安楽警視総監に提出し、宿泊料は負担することを誓っている。

答申書

今般本社取扱舞楽而留国渡航移民止宿料負担方ノ儀ニ付御尋問の処右ハ本月二十一日出帆予定期日ニ有之候間二十二日以後出帆迄延期中ノ移民止宿料ハ当然本社ニ於テ負担ノ心得ニ有之候右御尋問ニ付答申候也

明治四拾壹年四月二十五日

東京市麴町区八重洲町一丁目一番地

皇国殖民合資会社業務執行社員 松井淳平

警視総監安楽兼道殿

これらを総合してみると、皇国殖民合資会社は、サンパウロ州政府との

10) 通商局「移民出発期日延期願出之件」。香山『回想録』118頁によれば、宿泊料1日1円50銭とある。

11) 「移民出発期日延期願出之件」と「期日延期ノ為ニ生スル移民費用ニ関スル件」は4月6日付で警視総監安楽兼道宛提出されている。

12) 1908年4月24日付「書簡」。

移民契約を結んだものの、募集移民数の不足、日露戦争後の経済不況下での資金調達困難による資金不足等により、出航すること自体が無理であったことがわかる¹³⁾。

これらの諸事情を香山はどのように受け止めていたのだろうか。『回想録』によれば、出航延期に伴う宿泊代に困った香山が、大阪朝日新聞記者鳥居赫雄の下に金策に行った際、鳥居から「笠戸丸出航の遅れている原因は船室改造ではなく、移民会社と外務省とのトラブルによるもので、船は以前から神戸沖で待機している事。移民の皆が宿賃に困りつつある事。新聞社ではその発表時期を考慮中である事」等を聞いていた¹⁴⁾。この文からも移民達には出航遅延の真相は全く知らされていなかった事と、香山自身も差ほど深刻に受け止めていなかった様子もわかってくる。

出航後、皇国殖民合資会社は1909年12月、移民保護法並びに同施行法細則に従い本社解散手続きをし、15日付「営業廃止届」を外務大臣に提出している（図1）。また、これによって皇国殖民合資会社は営業利権等を竹村殖民商館へ移譲した。高知県の富豪竹村與右衛門の個人名義となった移民取扱業は、1910年6月の第2回旅順丸移民から1914年5月の第3回帝国丸移民まで7,600余名を渡航させたのち、業務一切を水野に譲渡した。水野は同年1月南米殖民株式会社を設立し社長に就任した。1917年廃業し、以降は移民会社の大同により海外興業株式会社一本に統一されていった¹⁵⁾。

2. 移民船生活の中で

4月28日午後5時、笠戸丸はようやく神戸港を出航した。その乗船者

-
- 13) 皇国殖民合資会社は創立から廃業に至るまでに本社を以下の様に移転していた（カッコ内は移転年月日の略表示）。東京市京橋区鎗屋町10番地（19040331）、業務執行社員松井淳平 ⇒同市麴町区八重洲町一丁目一番地（19070121）⇒同市赤坂区丹後町15番地（19090721）⇒同市麻布区新堀町7番地（19091208）、整理事務所設置（廃業）、業務執行社員永嶋亀代司⇒同市芝区三田四国町2番地1号（19100825）。外務省通商局『皇国殖民株式会社業務関係雑件』単巻1903年。『皇国殖民合資会社業務関係雑件（一）』1905年及び『同（二）』1908年等より作成。
- 14) 香山『回想録』、118頁。東京朝日1908年4月8日付2面「伯国移民出航延期」あり。
- 15) 坂口満宏「誰が移民を送り出したのか」『立命館言語文化研究』21巻4号、2010年、53-66頁。前掲注6、青柳郁太郎、1941年、171-173頁。通商局「開業届」、「廃業届」『南米殖民株式会社業務関係雑件』3門8類2項292号。通商局『移民取扱人関係雑件』3門8類2項300号。

はブラジル行契約移民が全国11府県から175家族781人、非移民が全国8県から17人の798人となる。従来の書籍等では「自由移民」という概念を用いているものもあるが、『第一回伯刺西爾移民渡航者名簿』にはその概念による分類は見当たらない¹⁶⁾。皇国植民合資会社との間に契約を取り交わした家族移民が所謂契約移民であって、彼等は三等船室での渡航者となり、特別三等(特三)船室以上の船賃を支払っての渡航者とは異なっていた。船賃を支払う渡航者は移民契約をしていないので非移民扱いとなった。単にこの2種類



図1 営業廃止届

出典：皇国植民合資会社業務関係雑件(二)

にしか分類されていない。何故笠戸丸の非移民を「自由移民」と称してしまっているのか、誤解がある¹⁷⁾。例えば、香山自身、単なる渡航者であったが故に非移民と記載されていたにもかかわらず、彼の著『回想録』の中では自ら「自由移民」と表記している。当時の分類では、ブラジルとしてはサンパウロ州政府との移民契約内容に該当する移民だけが必要だったわけで、「自由移民」という概念は生まれていなかったと考えるのが妥当ではないだろうか。移民の概念規定の曖昧さが表出していたと考えるべきであろう。また、サンパウロ政府との移民契約第1条では「農業労働に適する者3人~10人により成る家族を組織」とある他に、第2条では「石工大工又は鍛冶(略)の数は移民総数の5分を超過してはならない」と規定されているにもかかわらず、移民渡航者名簿には職業の記載はなく、渡航者全員が「農事労働者」に分類されている。石工・大工等は何を以て区別しようとしたのか、分類が曖昧である。非移民で熊本県出身の香山六郎は特三船室に入室しており、長野県出身の矢崎節夫

16) 皇国植民合資会社作成の『第一回伯刺西爾移民渡航者名簿』によれば、「契約移民(家族移民)名簿」と「非移民名簿」に大別され、非移民名簿には、1908年4月22日調とも記述されている。

17) 香山『回想録』、137頁。香山『二十五周年紀念鑑』、9頁。香山『移民四十年史』、24頁。聖州新報社1949年11月、内山『かさど丸』、17頁。

や、山形県出身で鈴木貞次郎の従弟の高桑治兵衛のほか、東京府と兵庫県
の2家族7人などが香山と同じ船室で航行していることは『回想録』
で確認できる¹⁸⁾。この他非移民としての乗船者でブラジル以外への渡航
者は、アルゼンチン行3名とウルグアイ行1名のみであった¹⁹⁾。尚、一
等船室の水野や三原、2人の通訳夫人たちは、移民契約第13条により無
賃であったことも判明した²⁰⁾。

出航日の様子は、当時の大阪朝日新聞に取り上げられていた。同紙は
「巴西移民の有望」との見出しで、ブラジル政府から大人1人当たり60
円の補助金が与えられての移民であると報道している²¹⁾。

52日間の航海中、香山は上塚代理人、布施事務長の許可を得て『航海
新聞』を発行している。週1回、洋野紙1枚の裏表にペン書きとし、同
室の高桑治兵衛や矢崎節夫、片岡技師等に執筆を依頼したようだ。しか
し、彼らは新聞発行に賛成はしたが原稿は出さなかった為、香山は孤軍
奮闘せざるを得なくなり結果、プライバシーに関わる事など掻き立てて
乗船者からの響きを買ってネタ切れとなり、上塚からの忠告もあって発
行意欲を失い、3号で廃刊となったという²²⁾。香山と上塚氏との感情的
不具合はこの頃から燻っていたのかもしれない。

香山の「大阪朝日新聞社のブラジル通信員の卵となったのだ²³⁾。」と
いう一文から、鳥居との口約束とはいえ通信員としての自覚を持つこと
で香山は、記録することの重要性を認識して行ったと考えられる。どの
ような内容も詳細に書き留めようとした香山に純真で前向きな姿勢が
あったと解釈もできよう。このことは香山が晩年、聾啞者となりながら
も『回想録』を書き上げた強い意志と姿勢にまで貫かれていたと云える。

18) 高桑治兵衛については、香山の『回想録』でもそうなのであるが、「高桑治平」と表記している書物もある。拙稿では非移民名簿に従って「高桑治兵衛」と記す。香山『回想録』、122-123頁。

19) 皇国殖民合資会社『第1回伯刺西爾移民渡航者名簿』と『25周年紀念鑑』を突き合わせた結果である。

20) 移民契約第13条第2項に「移民運送用ノ船舶ニ於テサントスヨリ日本マデ往復トモ一等船客6人マテラ政府ノ為メ無賃搭載スルコト」とある。

21) 前掲注9、丸山、1958年、16-18頁。東京朝日1908年4月29日付2面「伯西移民出発（神戸）」あり。

22) 香山『回想録』、126-127頁。ブラジル日本移民最初の日本語新聞であったが、1908年5月10日頃発刊とされたという確証はない。

23) 香山『回想録』、119頁。

図2 第1回伯刺西爾移民渡航者名簿

出典：国立国会図書館憲政資料室「ブラジル日本移民史料館所蔵 伯刺西爾移民名簿（乗船名簿）内容一覧」より抜粋

自分を見つめる時間の多かった移民船内生活の中で、香山の胸中には父親が発行していた『不知火新聞』への想いと、香山10歳当時、貧困ゆえに『九州日日新聞』の活字工として働いていた経験、さらには大学時代の雑誌社での記者活動など、過去の経験を通した新聞発行への思いが覚醒し始めていたのではないかと推察される。さらに移民船と云う閉鎖された階層社会の中で、三等船室の契約移民と特別室の一般客との待遇の相違を目の当たりにし、一渡航者であった香山の内部に、移民の視点から物事を捉えようとする思考体系、所謂下から目線が構築され始めていたのではないかと推察される。一渡航者から一移民へと香山の心理が変換して行く起点がそこに存在したと云えよう。

移民船生活の中でもう一つ人生の転機となる事例が見られた。航海中、

熊本県出身の橋口重正の妻タニの弟で、橋口家の構成家族員であった村崎豊重（当時19歳）を医務室に見舞いに来た橋口夫妻と出会い、橋口から妻タニを紹介された。その時橋口がタニに香山の事を「弟重雄と済済學4年の折、寄宿舎で同室だった方」と説明したようだ²⁴⁾。同県人である事も要因の一つとなって、この一言が其の後の香山とタニの精神的距離を縮めたとも考えられる。橋口重正が病没後、香山が結婚することになるタニとの出会いは、タニの弟村崎の発熱見舞いの船内医務室であったのだ²⁵⁾。

3. 皇国殖民合資会社サンパウロ支店での生活

1908年6月18日午前10時頃、笠戸丸は52日の航海の後サントス港に着岸した。出迎え人は駐伯日本公使館一等通訳官の三浦荒次郎と鈴木貞次郎、サンパウロ市の日本雑貨店藤崎商会副支配人後藤武夫、皇国殖民合資会社事務代理人モンティロの4人だけだった。淋しい出迎えではあったが、その時出迎えの鈴木貞次郎から「日本人によく似た土人がいる」という話を聞き、香山はその土人の話す言葉をブラジルでの自分の生涯の研究にしたいと決心している²⁶⁾。後に香山はグアラニー語の研究に傾倒して行く。ここには香山の新聞人としての顔とは異なる民族学研究者の一面がのぞいている²⁷⁾。

初めての日本人移民をブラジルの人々はどうのように受け止めたのであろうか、ブラジルの新聞の一つ「CORREIO PAULISTANO」紙は、6月25日の第一面に“Os Japoneses em São Paulo”の見出しで、日本人の礼儀正しさ清潔感溢れる身だしなみ等を賞賛すると報じ、「Comércio de São Paulo」紙は、ヨーロッパ移民と比較して下記のように絶賛した。

24) 香山『回想録』、126頁。

25) 橋口重正は1911年2月16日、リオデジャネイロ州イグアス移住地でマラリアで死没。同2月21日、タニは次女静子を出産。

26) 香山『回想録』、136頁。これが香山のインディオ研究のキッカケになっている。鈴木貞次郎は1905年12月、東洋汽船会社の南米航路第1回船グレンファーク号船内で水野龍と意気投合し、伯刺西爾移民の先駆となった人物。著書に『日本移民の草分け』1967年、非売品がある。

27) 「グアラニー語五つ六つ」『聖報』1925年5月8日付（第177号）などその現れである。

本州内地ノ耕地労働ニ従事センカ為先頃到着セル日本植民ヲ移民収容所ニ訪問セル人ハ其清潔ナル其熟練セル其如何ニモ熱心ニ学ハントスルカ如キ風采ヲ見テ感嘆ノ辞ヲ発セサルヲ得サリシナルヘシ²⁸⁾。

1908年6月27日、沖縄県人の約半数が嶺昌通訳と共にモジアナ線カーナール耕地へ出発したのを契機として、7月6日、山口・愛媛両県の15家族が仁平高通訳と共にソロカバナ線ソブラード耕地へ出発するまで、契約移民は通訳に伴われ6つの耕地にそれぞれ配耕されていた(表2)。上塚は皇国殖民合資会社サンパウロ支店を香山と共に立ち上げ、香山は事務所に寝起きしながら上塚の書記生として配耕先別移民名簿作成を始めていた²⁹⁾。

表2 笠戸丸移民配耕地

	耕地名	沿線鉄道名	通訳者名	該当県名	家族数	配耕者数
1	カーナール	モジアナ線	嶺 昌	沖縄	21	155
2	フロレス	イツー線	大野 基尚	沖縄	26	183
3	サン・マルチーニョ	パウリスタ線	鈴木貞次郎	鹿児島	27	104
4	グアタバラ	パウリスタ線	平野 運平	鹿児島、新潟、高知	14	51
5	ズモン	モジアナ線	加藤順之助	福島、熊本、広島、宮城、東京	52	207
6	ソブラード	ソロカバナ線	仁平 高	愛媛、山口	15	50
	合計				155	750

香山『在伯日本移殖民25周年紀念鑑』聖州新報1934年、14-24頁より作成。笠戸丸乗船者数と異なるのは、都市労働者等として残留した人物は除いているため。

しかし、日本人移民を礼賛した新聞内容とは裏腹に、厳しい現実が移民たちの前に突き付けられた。1908年7月17日、ズモン耕地から間崎三三一を含めた青年4名がサンパウロの事務所に逃亡してきた事件を発端に、ズモン耕地事件は紛糾してしまった³⁰⁾。ズモン耕地に配耕された

28) 通商局「本邦移民ニ関スル伯国サンパウロ市発行新聞紙ノ評論」『通商彙纂』1908年(1)、51頁。香山『回想録』、140頁には、移民収容所の移民局員の感想として同様の事が記されている。

29) 香山『回想録』、144頁。

30) 間崎三三一、高知県幡多郡出身。但し『25周年紀念鑑』他では、広島県又は原戸籍不明となっている。その原因は第2回竹村移民の広島県人と渡航し、ブラ

のは、福島県、熊本県、広島県、宮城県、東京府からの52家族207名であったが、契約書内容とは大違いの条件に彼らは激怒したという³¹⁾。『25周年記念鑑』では、その紛争の発端を以下のように述べている。

駅頭より耕地の楽隊で歓迎された日本移民であったが、耕地に着いてみると、移民の宿泊所に与えられたコロニア（移民長屋）の空き室には、土間に枯草が薄く敷いてあっただけであった。「俺達は馬じゃない…」という不平が移民の頭にムラムラと湧いた³²⁾。

人間としての人格を踏みにじるような待遇に加えて、移民の代弁者であるはずの加藤通訳が移民監督と移民との関係を保つ器量を備えていなかった事などから、耕主と移民間の労働争議は皇国殖民合資会社の水野・上塚と通訳の宮崎三等の調停も空しく決裂してしまったのだった。結果、8月25日、東京の1家族3名を残して全員がズモン耕地を撤退しサンパウロに戻った³³⁾。入耕が6月28日であったから2カ月にも満たない耕地生活であった。似たような状況が他耕地にも出現したため、これらの事情が決定打となって資金不足に悩んでいた皇国殖民合資会社は、外務省との信頼を失墜し廃業せざるを得なくなったのだった。

第2節 一移民への意識転換

1. サン・ジョアキン耕地：ノロエステ日本人移民のピオネイロ

香山は上塚代理人の依頼により、ズモン耕地脱耕組27家族中、広島県の2家族と熊本県の7家族、合計9家族27人の新たな契約労働地となったノロエステ線サン・ジョアキン耕地へ通訳兼監督として同行すること

ジルでも広島県人52家族とサンタ・コンスタンセ耕地に総支配人として入耕した事に起因するようだ。上塚周平がイタコロミー植民地創設時にプロミッソンに転居し、以後上塚を支援し続けた。死去に当りプロミッソン市はその功績を讃え、上塚周平の真向かいに墓地を提供した（2006年筆者現地踏査）。なお、間崎ら4名をプラス駅から事務所へ連れてきて最初に面倒を見たのが香山だった。以後、イタコロミー開拓まで香山は間崎と関わりを持つことになる。香山『回想録』、147-148頁。

31) 香山『25周年記念鑑』、20-24頁。

32) 香山『回想録』、28頁。前掲注31)、28-30頁。

33) 香山『回想録』、29頁、148頁。

になり、9月3日早朝バウルー向け出発した。バウルー駅には耕地の総監督が出迎えていた。

サン・ジョアキン耕地とは、後のトレド・ピザ駅のトレド・ピザ耕地のことで、駅舎は1909年の建設の為、当時の列車は林間に止まった。香山は初めての通訳兼監督として入耕している³⁴⁾。したがって、この出来事は香山にとって一渡航者の意識から移民事業に直接関わる移民の指導的立場にある自分を認識した一瞬であったと考えられる。9家族は熊本県飽託郡出身者を纏めて本耕地へ、その他の熊本県人と広島県人を分耕地に分散させた。香山は監督業務上、本耕地と分耕地を往復する生活の中で動植物の名前を覚え、日本人以外のコロノ達とも会話をするうちに、自然に逆らわない耕地生活に充実感を覚えたようだ。またコーヒーの収穫量も一日家族3人の労働で、ズモン耕地の5倍以上収穫できたことから、移民の心も落ち着き始めていたことも、香山を単なる渡航者意識から乖離させる大きな要因となっていたと考えられる。このサン・ジョアキン耕地入植者27名がノロエステ日本人移民のピオネイロ(pioneiro:先駆者)となり、香山もその先駆者となったのである。先駆者となったという事は、香山自身も移民と同じ立場になったと考えられる。

この経験は、後にバウルーに新聞社を創設する際の要因の一つになったと思われる。何故なら、香山は非移民としては第1回の渡航者であり、ノロエステ日本人移民地開拓のピオネイロでもあり、ブラジル語の解らない初期農業移民の通訳や耕地監督でもあったからである。これ等の要素が香山にブラジル日本人社会のエリートであることを自認させ、香山自身も他の農業移民とは異質であるという潜在的意識、所謂香山自身のプライドが、その後の香山の行動を常に支えていたと考えられるからである。新聞創刊の地をノロエステの玄関口にあたるバウルーに定めたのも偶然ではなかったのだ。極端に言えば「ノロエステは俺の第二の故郷。誰にも簡単に踏み込まれたくない」といった心理が、新聞創刊地を自ずと決定させたとも考えられる。サン・ジョアキン耕地での体験で、香山は単なる一渡航者からブラジル開拓の先駆者と自認する意識に完全に転

34) Caio SHIOMI, *DAITAN NA: Colônias Japonesas do noroeste paulista: Os japoneses da beira-linha da Estrada de Ferro Noroeste do Brasil* (Agência Produtora de Conteúdo, 2007): 63。香山『回想録』、151頁。

表3 サンジョアキン耕地入耕者一覧
(1908年9月3日)

	県名	郡市名	氏名	続柄	入耕先
1	広島県	山縣郡	山田 勘一	家長	分耕地
			〃 オリエ	妻	
			〃 実蔵	弟	
2	広島県	広島市	神田 寅三	家長	分耕地
			〃 シツノ	妻	
			須山 勘一	徒弟	
3	熊本県	飽託郡	大村 千太郎	家長	本耕地
			〃 さが	妻	
			〃 貞男	子	
4	熊本県	飽託郡	宮部 弥平	家長	本耕地
			〃 トワ	妻	
			〃 シツエ	娘	
5	熊本県	飽託郡	中川 仁蔵	家長	本耕地
			〃 トキ	妻	
			〃 五百樹	子	
			〃 坤一	子	
6	熊本県	八代郡	上田 豊喜	家長	分耕地
			〃 ジュキ	妻	
7	熊本県	八代郡	本嶋 儀男	家長	分耕地
			〃 ミト	妻	
8	熊本県	天草郡	橋口 重正	家長	分耕地
			〃 タニ	妻	
			〃 敏信	子	
			村崎 豊重	妻弟	
9	熊本県	飽託郡	井手 喜平	家長	本耕地
			〃 ツキ	妻	
			樫本 源蔵	甥	
合計：9家族27名（男17名、女10名）					

聖州新報『在伯日本移植民25周年記念鑑』より作成

であった。中川夫婦が遅れてサン・ジョアキン耕地に合流すると、香山は上塚にサンパウロへ呼び戻されている。僅か1カ月ばかりの耕地通訳・監督であった。香山はその時の様子次のように述べている。

私は（略）燃ゆる青春を抱いて終点リンス駅より来たノロエステ線の汽車に乗った。（略）サン・ジョアキンの破れ小屋が今のトレード・ピザ駅となったのだ。サン・ジョアキン耕地がノロエステ線における日本人の発祥地である³⁵⁾。

35) 香山『回想録』、157頁。

36) 香山『回想録』、158頁。トレード・ピザ駅は、現在のシンシナート駅とグアラントン駅の中間に存在した。

換したのだ。反面、単なる農業移民にはなりたくないという意識も強かった。そのことは「私は日本移民の一員としてこの耕地のコロノとなる気は毛頭なかった。耕地生活も好きだったが、私の血は都会生活、サンパウロ市を欲していた」の一文に凝縮されており、香山の目的確認と意思表示が明確になったと云えよう³⁵⁾。

サンパウロからサン・ジョアキン耕地に出発当時、3家族の主婦が妊娠していた。熊本県出身中川仁蔵氏長男坤一は、出発の前日に収容所内の病院で生まれたので、ノロエステ日本人移民の二世第1号となった。名付け親は水野である。分耕地の橋口タニも妊娠していた。1908年10月14日、長女ローザ・芳子を出産、同耕地3番目の二世誕生

2. サンパウロでの生活

サンパウロに戻った香山は、上塚の下で移民業務に専念していた。10月下旬になると、モジアナ線カナーン耕地の沖縄県人たちが脱耕しはじめサントス港へと集まり出していた。サントス港には貨物船の荷揚げ作業や埋め立て工事等の現金収入を得やすい仕事があった事と、職を求めて隣国アルゼンチンへ再渡航しようと出航船を待つ人々が集まり賑わっていた。しかし彼らの多くが露頭生活を強いられていたため、移民会社としてその対応を迫られていたからだった³⁷⁾。香山も宮崎通訳官や水野、上塚、藤崎商会の後藤武夫等と出掛けて耕地脱耕の沖縄県人の就職斡旋をしていた。

しかし日本の皇国殖民合資会社からの送金が途絶えていたので仕事探しを始め、香山と矢崎他2名は、ビスケット工場で働くことになった。その後、果物店の店子、家庭労働、玩具製造など様々な仕事をしている。

その頃日本の皇国殖民合資会社は破産状態にあり、サンパウロ支店の上塚代理人に支払う給与も途絶えていた。この窮状に対し在伯特命全権公使内田定植は、外務大臣小村寿太郎宛書簡「在サンパウロ皇国殖民会社代理人ニ関スル件」を送り、皇国殖民合資会社への厳達を説いている³⁸⁾。

サンパウロ市ニ在留中ナル皇国殖民会社代理人上塚周平ハ本年二三月以来同社ヨリ支給スベキ筈ナル俸給及手当ヲ毫モ送金シ来ラザル為メ近来非常ノ窮地ニ陥リ（略）移民会社代理人タル体面ヲ維持シ移民保護ノ職分ヲ完フルコト出来難キ現状（略）付テハ本公信着次第右皇国殖民会社ヨリ同代理人ニ支給スベキ数月分ノ俸給及手当ヲ一纏メトシテ至急同人ヘ宛テ伝送スル様同社ヘ厳達方可然御取計相成候様致度候（以下略）

この件に関し皇国殖民合資会社は約束不履行の為、9月に外務大臣小倉寿太郎に「始末書」を上伸している³⁹⁾。既にこの時点で皇国殖民合資会

37) 香山『回想録』、160頁。

38) 通商局「皇国殖民会社伯国代理人ニ関スル件」公第47号、1909年7月6日『皇国殖民合資会社業務関係雑件（二）』1909年。

39) 前掲注38)「始末書」の上申者は、同社業務執行社員松井淳平。

社はその業務一切を竹村與右衛門に譲渡していた訳で、その後も警視総監亀井英三郎から通商局長萩原守一宛「再三督促をしているが猶予願が出ているのでご承知願いたい」旨の書簡が交わされ、皇国殖民合資会社の経営破綻状態が浮き彫りにされていた。結果、上塚には1909年8月までの手当金の内金1000円が送金されたに留まった⁴⁰⁾。

本社破産によって上塚まで失職し、上塚は一介の労働移民と化し玩具製造を始めたので香山もその仲間入りをし、紙製玩具の製造と行商を始めている。

皇国殖民合資会社の権利一切は、水野の同郷者高知県の竹村與右衛門に譲渡され、竹村植民商館としてサンパウロ州政府の許可の下、第2回移民船旅順丸が1910年6月28日サントス港に着岸した。笠戸丸以来移民船の入港がなかった為、在伯日本人たちは棄民となった悲哀を感じていたが、この朗報で「蘇生の想に有之候」と喜んだという⁴¹⁾。移民者内訳は16県247家族909人で、水野と竹村植民商館番頭山地土佐太郎が同行していた。移民達は14耕地に配耕され、香山は再び耕地監督兼通訳人としてグアリローバ耕地に長野県（2）、熊本県（1）・千葉県（1）の4家族を引き連れて入耕している⁴²⁾。香山はわずか4家族14人の耕地監督兼通訳となったことに意欲を削がれていたようで、10月末には耕主側から解雇宣告を受け、サンパウロに戻り再び失業状態となった⁴³⁾。

3. ジャタイ耕地事件への関与

モジアナ線ジャタイ駅のジャタイ耕地には、第2回移民熊本・福岡県人21家族84名が通訳の大野基尚夫妻に伴われて初めて入った。耕地は小石だらけでコロノ泣かせのコーヒー園として人気がなかったようだ。しかし、この耕主の娘婿が当時のサンパウロ州政府農務長官の次男であったことから、上塚は第1回移民配耕での教訓を忘れて21家族も送り込んでしまった。その年のコーヒーは収穫できたが、除草期に入って石山の

40) 前掲注38)「御届 上塚周平」1910年2月21日、皇国殖民合資会社業務執行社員永島亀代司と上塚の代理人石塚御音弥太との連署で外務大臣小村寿太郎に届けられて決着となった。香山『回想録』、167頁。

41) 香山『25周年記念鑑』、40頁。

42) 香山『25周年記念鑑』、44頁。グアリローバ耕地は、カンピネイラ線ジョアキン・エディジオ驛にあった。モジアナ線グアタバラ耕地の隣接地である。

43) 香山『回想録』、178頁、183頁。

除草が進まなかった事から移民の不満が募りだしたという。牧場との境の間作地で米作りをしたところ隣地牧場の牛たちに稲を食い荒らされてしまった。この損害補償をめぐる耕主と移民側が対立し、大野通訳が耕主側の立場に立った為、移民の不満は更に強まり脱耕者が続出、遂には大野通訳迄サンパウロに引揚げてしまった。上塚は大野の後任に香山を指示した。この時から香山はジャタイ耕地紛争事件に巻き込まれて行く⁴⁴⁾。その時の様子を在サンパウロ臨時代理公使藤田敏郎は『伯国サンパウロ州巡回報告書』の中で、以下のように述べている。

移民中松原某なるもの深夜便通の為め外出したるに（因みに当国耕地には便所の設備無く、移民は皆山野に行き用便する慣習なり）番兵（略）突然出現、松原を拘ふ。同人抵抗せしに（略）松原を取圍み乱打せんとし時、本邦人移民は（略）之に対抗せんとせしかば、香山某（通訳）現場に赴き鎮撫しつつありしに耕主も武器を携へ出て来りて松原に向へり。香山の尽力にて双方共血を流すには至らざりき⁴⁵⁾。

事件の原因はいくつか挙げられたようだ。すなはち、1) 石山の耕地で除草がはかどらない事、2) アルマゼン (armazem: 食料雑貨店) の豆類買取代金が、隣地のアルマゼンより1俵につき3ミルも安かった事、3) アルマゼンの物品販売価格が高く、移民達の負債がなかなか抜けない事、それ以上に4) 移民たちを人として認めない耕主側の対応に、移民たちが激怒した事、さらに5) リオデジャネイロの公使館の対応の甘さと遅さに上塚と香山は不満を持っていた事などが複雑に絡み合っていたようだ。このように耕地からの退耕者が多かった理由を、人の移動の動機から考察すると動機「2) 土地の自然条件: 石ころだらけの耕地、3) ブラジル社会における政治的・経済的諸制度: 移民契約の不履行、4) 日本人としてのアイデンティティ: 日本人の生活習慣とブラジルの

44) 香山『回想録』、183-184頁。前掲注42)、52-56頁。

45) 通商局在伯臨時代理公使藤田敏郎『伯国サンパウロ州巡回報告書』「ジャタイ耕地」、1911年より抜粋。ジャタイ耕地はモジアナ線サン・シモン駅30km地点。この事件に関する藤田敏郎の報告に初めて香山の名が登場している。香山と藤田は日本の友人関係から間接的に繋がり、1921年、香山が『聖州新報』を創刊する際の新報の題字は藤田の揮毫による。

その相違から来る恥の考え方、6) 日本政府の対応：リオデジャネイロの公使館の対応が遅かったばかりでなく、現地で奮闘する皇国殖民合資会社々員の言動が日本政府にまで届いてしまった事等が関わっていたと云える。結果、移民たちは耕主の家の新築を請負っていた熊本県出身の段村卯七大工一家だけを残し、1911年2月2日、20家族全員が退去した。移民たちが耕地のアルマゼンに残した負債は、香山がコロノ各家族の青年を引率し、ノロエステ線マット・グロソソの鉄道工夫に就働させ、その賃金を向こう3カ月間で償還させることで決着した。なお移民達の総負債は10家族分で2コント80ミル余。「竹村移民会社伯国代理人法学博士上塚周平」と裏書きしたレトラ（手形）を発行して、日本人コロノのジャタイ耕地引揚は完了した⁴⁶⁾。この時の香山には公使館等の対応の遅れと甘さに激怒し、その権力に対する反抗心が表出し、常に移民の側に立って行動する積極的姿勢が目立った。

上塚はこの独身青年のマット・グロソソ州鉄道工夫就職運動を鉄道会社相手に始めた。竹村殖民の独身青年たち13人は家長連と別れてマット・グロソソ州へ旅立ち、引率者となった香山も青年組に一週間遅れて同行している。ジャタイ青年組は同耕地の雑貨店に未払いになっていた1コント800ミル余の負債返済のために、同州トレスラゴアスで暑さとマラリアにめげず働き、香山も同様であった⁴⁷⁾。マット・グロソソ州生活に慣れ始めた頃、上塚からジャタイ移民の借金督促状が届き、香山は移民契約第7条に基づきジャタイ青年組に借金返済方を承諾させ、月末の工夫給金より各人の借金額を差し引くことを納得させた。香山は現金2コントス700ミルと上塚宛の手紙を、依頼人を通してサンパウロの竹村商館へ届け、上塚から現金受領の音信を受けた。香山は、ジャタイ耕地移民引揚げの負債支払いの義務責任を青年達と果したのだ⁴⁸⁾。

なお、1911年末における第2回移民配耕16耕地の耕地残留数は668人、退耕者は235人で退耕率26.0%であった。第1回移民の退耕率48.2%に比べれば定着率は高くなったと言えるが、ジャタイ耕地の退耕率は

46) 香山『回想録』、191-192頁。

47) 香山『25周年記念鑑』、52-58頁。『回想録』、193-194頁。

48) サンパウロ州との移民契約第7条（部分）によれば『金額支払の責任は各家族全員に帰し、家族全員は家長の負債に対し連帯責任を負う』とある。香山『回想録』、194頁。

96.4%となり、第2回移民配耕地の中で最も定着率の悪かった耕地と言
い伝えられている⁴⁹⁾。

第3節 開拓者、その喜びと危機

1. 結婚、一家の長としての決意

香山が橋口重正夫人タニさんを意識したのはノロエステ線サン・ジョ
アキン耕地のアカンパメント時代からであった。1911年2月、彼女が未
亡人になり、三人の幼児を連れて帰国かブラジル残留かで迷っていた時、
「ブラジルの方がいいじゃないですか」と助言し、ルス駅裏通りのコー
ヒー店で「一杯のコーヒーを二人で飲みながら、水入らずの三々九度を
していた。」という⁵⁰⁾。彼女の帰国問題は解消し、香山は三人の子供ある
女性と結婚、人の子の父ともなる自分に大きな責任を感じたようだ。
1913年の5月、タニ32歳、香山29歳であった⁵¹⁾。タニ子は三人の子持ち
ではあるが、器量なり健康なり気質なり、また香山を夫と頼む気振りに
香山は満足していたようだ。結婚当時、玩具売りの生活で生計を立てて
いたが、「レデンソンの家で床に入る前に、売り上げの70余ミルのニッ
ケルや銀貨を全部タニ子に渡した。以来、収入は妻に渡してしまうこと
にしていた。」という一節に、タニ子への信頼感、家族愛などが素直に
表現されている⁵²⁾。

1914年8月、第一次世界大戦が勃発した。移民青年知識人の間ではブ
ラジルは参戦するか、日本はどうするか等と話題となった。香山はここ
で初めて「移民青年知識人」という言葉を使っている。彼の心理の中
には、「自分は単なる移民ではないのだ」といった区別意識が潜在し、彼
自身「移民」という言葉を使ってはいるが、所謂「契約移民」ではな
いのだという自意識を明確に表現している。この段階での香山には、ま
だ、単なる渡航者とはいえ移民である事に相違はなかった事実を100%自己
理解する勇気はなかったようだ。この論文の課題の一つである「何時か

49) 香山『25周年記念鑑』、56頁。青柳『日本人発展史』上巻、293-295頁。香山
『四十年史』、80頁。

50) 香山『回想録』、236頁。

51) 香山『回想録』、238頁。結婚後は妻を「タニ子」と呼ぶようになっていること
に注目。

52) 香山『回想録』、244頁。

ら移民を意識始めたか？」の答えがここに隠されていると考える。

2. モンソン植民地での借地農

1914年、水野を社長とする南米殖民株式会社には関わらなかった香山とタニ子との結婚生活は楽ではなく、タニ子の産後の肥立ちを待ってモジアナ線バタタエス支線ブロードスキイ駅のファルツラ耕地の日本人コロニア総監督だった村崎豊重を頼って行った。村崎宅に着くと、敏信と芳子が汚れた姿で待っていた。久し振りに見る母子の対面だったとある。香山にとっては結婚当初の苦労と小さな喜びに満ちた時だったと云えよう⁵³⁾。これで香山の家族は故橋口重正との間に生まれた3人の子供、敏信、芳子、静子と香山との間に生まれた香山の長女露子の6人家族となった。

1915年3月、香山たちは村崎のリードでソロカバナ線モンソン植民地へ一文無しで集団移動した。モンソン植民地は1911年に開設されたサンパウロ州政府直轄の植民地で、建設当初に鈴木貞次郎の誘導で、長崎県人3家族が入植していた。彼等こそサンパウロ州における日本人コロノの殖民生活への転向第1号「殖民の嚆矢」であった。藤田敏郎は1家族25町歩（25ha=1ロッテ）、地代農具等は8年賦で（4年目より償却開始し8年目に償却完了するシステム）あったと報告している⁵⁴⁾。

ロッテ（区画）には板壁白ペンキ塗りの家、近くを流れるオ・パルド河での河魚釣り、気候もモジアナ線より涼しい。さらにサン・ジョアキン耕地の頃の第二回移民が多かった。橋口さんにはアカンパメント時代に随分お世話になった、入植されるならどんな便利でも計ります。ポルトガル語のわかる人たちが入植してくれると心強い、と皆に喜ばれたという。4-5日稲刈りの手伝い・落穂ひろいをして「植民者の一階段を昇ったような自信に満ちていた」と述懐している⁵⁵⁾。香山が移民となった瞬間と捉えたい。しかし良い事尽くめではなかった。耕作条件は良かつ

53) 香山『回想録』、250頁。

54) 藤田敏郎『海外在勤四半世紀の回顧』日系移民資料集、南米編2、第17巻、図書センター、1999年、223頁。

・前掲注49)『25周年記念鑑』、67頁によれば、「殖民の嚆矢」は、淵清治、坂口仁四郎、山本治三郎の3氏であった。

・通商局 松村貞雄領事報告『通商公報』1915年、第223号、53頁。

55) 香山『回想録』、252-255頁。

たが、飛蝗の害が酷く移民の定着率が低かったという。アルゼンチン方面から黒雲の如く飛来する飛蝗は、一日でトウモロコシなどの収穫物を食い尽くし、沃野を枯野と化してしまう凄まじさだったのだ。更に飛び去る際には幼虫になる卵を地中に産んで行くので次の実りの保証はない。飛蝗の襲来区域は、シャヴァンテス驛より北はポツカツ地方まで東西に30kmの幅に限られているという。結果、飛蝗の襲来に耐えかねて植民地住民は再び耕作適地を求めて移動して行くしかなかったのだ。香山たちも同然であった。人間には不可抗力である自然現象により、土地がどれほど肥沃でも将来性を見いだせなくなり、移動せざるを得なくなる事があると云う事が理解できる。すなはち、人の移動の動機「1）自然災害」がこのモンソン移民を苦しめていたのだった。飛蝗襲来の情報に関する鈴木貞次郎と金子保三郎からの被害見舞いの手紙の中に、大阪朝日新聞社の稲垣治編集部長から正式に朝日新聞のブラジル通信員に任命する辞令があったという。差出人は大朝の編集長鳥居赫雄で、ブラジル通信は1カ月3回、1回一段半位の文で5円の支払いと新聞無料の配布とあったという⁵⁶⁾。正式に大阪朝日新聞のブラジル通信員になったことは、香山が一移民から新聞人になる大きな契機であったといえる。朝日新聞は金子保三郎の配慮でサンパウロからモンソンに送付されるようになり、この頃から香山は新聞人になったと述懐していることから、本論の課題④「一移民として開拓農民になりながら、何故、聖州新報を立ち上げようとしたのか。その根拠は何で、どこにあったのか」の根拠はここに見出すことができたことになる。人の移動の動機「5）親族や知人、地縁集団による呼寄せ、勧誘」の具現化と云えよう。

第4節 上塚周平との訣別

上塚周平には同志を容易に信じようとしない性格があった。やがてそれは香山の上にももたらされた。1917年、上塚氏の再渡伯により、香山は1917年10月頃、鈴木貞次郎と共に上塚の要請による新植民地の土地探しとしてノロエステ線イタコロミーの土地を下見していた。豊かな林相

56) 香山『回想録』、266頁。永田稠『南米一巡』日系移民資料集第4巻、日本図書センター、1998年、116-117頁で、永田は香山が朝日新聞の通信員であったことについて「朝日（新聞）が南米の記事に異彩を放ち得るは、君がある為であらう」と賞讃している。

の原始林地帯、これが上塚植民地の原始の姿であった。この地域はその後のノロエステ線沿線開拓の模範的植民地となって行く。

1918年6月、エイトール・レグール驛に着いた香山は山伐り請負師になっている。山伐りの仕事が始まると同時に敏信と森林伐り倒しにかかり、小屋の敷地を均して長さ10m、幅5mの小屋を建て、井戸を掘り水が出る時を待って移り住んだ。遂にモンスンからイタコロミーへと香山一家は移転したのだった⁵⁷⁾。

1920年頃、上塚の知人の資本家菊池恵次郎が「新日本村建設」に出資する目的で日本を出発した。これからはイタコロミーも本格的な事業が始まるということで香山も鈴木も期待していたが、上塚からは、これまでのお互いの協同事業は打ち切り、今後はイタコロミー植民地と本格的に命名する。組織換えするにあたって、香山は植民地小学校の教員として働くことを上塚から依頼されたにすぎなかった。香山は上塚が香山を植民地経営の一員として依頼したのではなかった事に落胆し、上塚の欺瞞を見抜きその元を去った。この「新日本村建設」の後援者は菊池恵次郎と三隅棄蔵副領事で、田付大使はこの計画に助力を与えていたという。菊池氏は当時の金で35,000円〔70コントス〕を拠出していたようだ⁵⁸⁾。上塚氏のもくろみを見破った香山の上塚氏と訣別の時（1921年元旦）の状況は『回想録』に鮮明に記述されている。

小 括

移民船笠戸丸の一渡航者に過ぎなかった香山六郎は、皇国殖民合資会社の水野龍の指示により、サンパウロ到着後、同会社代理人の上塚周平の下で書記として通訳配耕地監督など諸事に対応していた。これらの行為を通して香山は、兵役逃れの単なる一渡航者から開拓に勤しむ一移民へとその心境を転換させて行った。しかし、新たな開拓への挑戦、挫折を通して、一移民ではなく、社会の情報に飢えていた移民たちに、ブラジル国内や日本の情報を伝達する仲介者になりたいと奮起して行く新た

57) 香山『回想録』、300頁。同頁には1918年6月、新築した家の前の香山一家の写真が掲載されている。

58) 香山『回想録』、309-310頁。竹崎八十雄『上塚周平』上塚周平伝刊行会、1940年、279-293頁。

な香山像が見えてきた。

課題③の何故、いつ、単なる渡航者から一移民へと意識の転換を図ったのかについては、ズモン耕地の脱耕者を引き連れて通訳・監督としてノロエステ線サン・ジョアキン耕地に入植、自然の中で生活する事に喜びを見出し始めた時であったが、まだその時点では、一移民となる事には納得していなかった。モンソン植民地に入植し、旧知の移民達と共に開拓に従事する中で、「殖民者の一階段を昇ったような自信」を感じ移民としての自己を容認していた。課題④の一移民として開拓農民になりながら、何故、聖州新報を立ち上げようとしたのか。その根拠は何で、どこにあったのかについては、その根拠を2つ挙げる事ができた。第1は、1908年10月、ズモン農場脱耕者9家族を率いてノロエステ線トレード・ピーザ駅サン・ジョアキン耕地に出向いた時、日本人による集団開拓をスタートさせたのは自分である、「自分こそノロエステ線のピオネイロ（開拓者）なのだ」という自負心、すなわち日本人としてのアイデンティティの具現化に気付いた時に在ったといえる。この気付きは、笠戸丸の同船者であり同県人であった元橋口重正夫人タニとの結婚、家族の増加による貧しくとも平穏な生活を獲得できた香山の、戸主として家族を守りつつ生きなければならないという責任感の増幅とも関わっている。第2は、大阪朝日新聞のブラジル通信員になったことにある。金子保三郎からのモンソン植民地の飛蝗害お見舞いとその契機であった。サン・ジョアキン耕地もモンソン植民地も、香山にとっては移民を意識する原点そのものであったと云える。香山にとってこの地は第二の故郷となっていたのだ。このような観点からも『聖州新報』は、サンパウロではなくノロエステ地方バウルーで創刊して当然であったと考えられる。

さらに、新聞創刊の決定的誘因として、1921年1月、バウルー領事館新設があった。この事によって一地方都市に於てもブラジル国内外の情報を、瞬時に入手伝達することが可能になった。メディアとしての新聞の果す役割の核が形成されたのだった。

香山が一移民から新聞編集人としてどのような活躍をして行くのかについては、今後の研究課題としたい。